

第5回 GRAND MASTERS HOCKEY ASIAN CUP

2019. 10. 17. - 10. 23.
Donghac Sunrise Hockey Stadium

【試合結果・戦評】

○10月17日(木) 11時00分 < Aピッチ >

< 第1試合 > (T/T 第1戦)

日本	0	$\left[\begin{array}{ccc} 0 & - & 0 \\ 0 & - & 0 \\ 0 & - & 0 \\ 0 & - & 1 \end{array} \right]$	1	LX Club England
----	---	--	---	-----------------

第1Qの立ち上がりから、中盤をLXに支配されるが、LXも23m辺りからのパスミス、トラップミスが多く、何とか攻撃を持ち堪える。日本は、ディフェンスのマークの甘さ・ズレが目立ち、LXのサークル内への打ち込みを容易にし守備に苦しむ。攻撃陣も、ボールの持ちすぎやパスの遅さ、トラップミスからゲームの流れをさらに悪くする。

第2Q、日本は、ようやく2列目のパスがつながりだし、中盤から左右サイドラインの縦攻撃が功をそうし、再三サークル内のセンターリング、持ち込みがうまくいくようになり、PC・シュートへとあと一歩までチャンスができる。前半、チャンスを活かすきれない。日本・LXとも攻撃のツメの甘さで無得点で終える。

第3Q、LXは縦へのロングパスを多用する戦法で一機に攻めに転じてくる。日本は前半の課題のマークも落ち着いてできるようになり、攻撃の機会が増してくる。しかし、サークル内への持ち込みが自らのキック・インターフェアでチャンスを逃し、PCにも繋がらない。両チームとも、中盤が開きだし、日本は自陣23mからの速攻の機会が増すが、味方への最終パスが流れて繋がらない。フォローの距離も開いて、前かがみのみ展開となる。速い攻めに、状況に応じた正確なパスや誰がフォローに上がるのかが求められた。

そんななか、第4Qの53分、LXが左サイド23mから日本守備陣の一瞬のスキをつき、右ウイングへのセンターリング。シュートを許し、PCを奪われる。第1シュートが守備のトラップミスからキックとなり、PSを与え、GK左側に決められ失点する。日本は56分、相手サークル内でインターフェアによる初めてのPCを奪う。右ポストのタッチシュートを狙うがタッチできず。さらに、58分、川島のドリブルインからPCを得る。リプレーのPCのリバウンドもFWが詰めきれずチャンスを逃す。攻める日本は、62分に鹿野のドリブルインからPCを得るが、リバウンドボールをLXの守備陣にクリヤーされる。日本は、最後まで粘り強く攻めたが一点が遠いゲームだった。

大会では、初戦の入り方がどの大会でもとても難しいが、①パスの課題 ②マークの課題 ③フォロー・カバーの課題 ④周囲の状況確認の課題 ⑤Tポイントへの配給や相手ウラ側で勝負する意識の課題 ⑥PCをを取りに行くプレーの課題が多かったが、序盤で失点を許さず、ゲームの流れを立て直せるようになったことが、一番の成果であった。終盤のゲームの流れを今後の試合に活かしたい。

○10月18日(金) 12時00分 <Aピッチ>

<第2試合> (T/T 第2戦)

日 本	1	<table border="1"><tr><td>0</td><td>—</td><td>1</td></tr><tr><td>0</td><td>—</td><td>0</td></tr><tr><td>0</td><td>—</td><td>0</td></tr><tr><td>1</td><td>—</td><td>1</td></tr></table>	0	—	1	0	—	0	0	—	0	1	—	1	2	Southern Cross
0	—	1														
0	—	0														
0	—	0														
1	—	1														

第1Q、初戦の反省から、①マークの徹底 ②攻撃パターンの共通理解など、修正を加えて臨む。ゲーム開始からパス回しが良く、特に右サイド攻撃に厚みを持って攻める。11分、水谷がサークルトップまで持ち上がって、上手くPCを得る。シュートを外し得点に至らなかった。逆に、13分、日本は、左サイド奥からのフリーヒットのボールをブロックされ、ディフェンスが振り切られ、サークル内に持ち込まれて失点を許す。立ち上がりから日本ペースのゲームの流れただけに悔やまれる失点となる。一瞬の間の反撃での失点だけに、相手の集中力あるプレーに学ぶべき点がある。

第2Q、徐々にサザンクロスがパスが回り出し、押し込まれるケースが多くなる。しかし、日本は、1対1のマークから複数でのボールカットで中盤のボール支配をする。第2Qは、互角のゲーム展開で終る。

第3Q、日本は右サイドから攻撃を仕掛けるが、中盤の相手ディフェンスの厚みが増し、攻撃の芽が抑えられる。一方、サザンクロスは、パス回しからサークル内へ強打を試みるが日本の守備陣が確実にトラップして、判断良くクリヤーする。攻める日本もサークル内へボールを入れようとする。が、23mまで持たせてはもらえるが、なかなかサークル内へボールを入れられず、阻止されて苦戦が強いられる。ようやく43分と50分にPCを得るが得点が遠い。しかし、課題だったPCの奪取の意識が上がってきたのは成果だ。

第4Q、サザンクロスが厚い攻撃を受けつつも、後藤の積極的な攻め上がりで、右サイド攻撃が良くなり、右コーナーからのセンターリングが、Tポイントに配給され、相手ディフェンスのウラ側に通るようになる。2列目のパス回しがよりできるようになり、相手サークル内へのドリブルインも多くなる。43分のPCは失敗に終わるが、45分の相手PCはGK天野のファインセーブで切り抜けると、60分、23mでボールを受けた高倉がドリブルで相手をおかわしてキックを誘い、PCをとる。川上が左に構える水谷にパスしてクロスシュートが右ゴールにきれいに入り、同点とする。しかし、終了間際の69分、サザンクロスのPCのリバウンドを押し込まれて勝ち越される。日本は初戦の課題解決を意識してPCを奪取できたことや、相手マークも徹底して互角以上守り、ゲームの流れを維持し展開できたことは高く評価できるのではないかと。この試合からは、サザンクロスの自力なのか、日本のゲーム終了間際のゲーム運びの選択視の誤りなのか、学ぶべきことが多いゲームと言える。

○10月20日(日) 14時00分 < Aピッチ >

< 第3試合 > (Asian Cup 第1戦) ・ (T/T 第3戦)

日本	3	2	—	0	0	Korea
		0	—	0		
		1	—	0		
		0	—	0		

アジアカップ+65の本戦第1試合。LX戦、サザンクロス戦の疲労が残るなか、集中力が求められる試合。韓国チームの戦力分析を基にFW・DFとも攻守の共通理解を図って臨む。

第1Q、日本は右サイド攻撃からサークル内のTポイントへの配球がうまくいき、相手ウラ側を攻め順調な立ち上がりを見せる。フィールドゴールのチャンスも数度あったが、ゴールをわずかに外すなど今一步の決定力不足を覗わせる。さらに韓国の守備の良さにクリヤーされる場面が続く。11分には、最初のPCを得るが、川上のシュートボールをタッチ出来ず好機を逃す。攻める日本は、13分、2度目のPCを得て、川上のサークルトップからのシュートが左隅に決まり先取点を上げる。チームの一体感と余裕を生む得点となる。さらに、17分、右サイドからTポイントへ、そしてGK前へとパスが通り、横田が押し込んで追加点を上げる。

第2Q、攻撃の流れは、日本ペースで進む。韓国の守備も粘り強く、サークル内のボールを再三クリヤーされる。同時に、日本攻撃陣の連続したプレーの無さがチャンスを逃している。(プレーを途中でやめることで攻めが途切れる。) 自陣中盤、DF陣が近くの意味方にパスを回し、ボール回しが速くなり、ゲームの安定感が出てくる。左右サイドからのセンターリングに加え、ドリブル攻撃も活きてくるが、得点までには至らず。

第3Q、走力が落ちた韓国に対して、日本は中盤から終盤にかけて2列目ハーフ陣が起点となり、攻撃に厚みを加える。Tポイントへの配球と同時にサークル内へドリブルインと多彩な攻撃を仕掛ける。PCがなかなか奪えない状況が続くが、42分、PCを得る。シュートのリバウンドボールが右エンドラインに残るなか、鹿野がうまく拾って、GK前の湯蓋にパスし、見事なタッチシュートを決めて3点目を奪う。

第4Q、韓国も粘りをみせ、日本の2列目のウラ側の空きスペースを活かそうと終盤からロングパスでトップにつなぎ速攻で攻撃を狙ってくる。韓国アンダーエイジ2選手は、終始日本守備陣のトラップミスからシュート機会を伺った戦法で臨んでいる。前半から終始、日本守備陣の正確なインターセプトやトラップで韓国の攻撃を阻止してきた。第4Qもピンチ時にはしっかりとクリヤーし、体をはったプレーも良かった。

まずは、アジアカップ1勝。この韓国戦でみせた、Tポイントへの配球、横の意味方を活かすパス、攻守ともサークル内での意思疎通、守備陣の確実なマークとトラップ、ジャブの活用など状況に応じたプレーが良かったと評価できる。一方、ゲームの流れを引き寄せるためにもPCをどう取るか。味方同士のパスタイミング、誰へのパスか、周囲の状況を把握できているか。次試合にむけて課題が残るゲームでもあった。

○10月21日(月) 14時00分 < Aピッチ >
< 第4試合 > (T/T 第4戦)

日本	4	0	—	0	1	Alliance
		2	—	1		
		1	—	0		
		1	—	0		

第1Q、立ち上がり、日本は、右Tポイントへの配球や右コーナーからのセンターリングで攻め、1分でPCを取る。しかし、シュートを阻止される。その後、シュートチャンスをつくるも得点に至らず。チャンスを活かせなかった焦りから徐々にパスミスが増え、攻守ともにコンビネーションが悪くなる。また、周囲の状況をみないドリブルが多くなり、コントロールミスでボールを取られるケースも増える。選手間の意思疎通が改善できないまま時間が経過する。

第2Qに入っても、全体的に動きが重く、攻守の修正がきかず攻撃が止まる。逆に、22分、Allianceにサークル内に持ち込まれシュートを許すと、DF同士のブラインドから失点をする。ゲームの流れを日本ペースに変える打開策が求められる時間帯の24分、PCを得て、川上がゴール左にストレートシュートを決めて同点とする。さらに、33分のPCでは、川上のパスをうけ関谷がゴールポスト右でタッチシュートを鮮やかに決めて勝ち越す。練習のバリエーションがきちっとハマったゴールだった。ようやく、落ち着いたゲーム展開に持ち込む。

第3Q、リードした日本は、余裕がもてるようになり、中盤でパスを回せるようになる。しかし、なかなかサークル内のチャンスを活かせず、逆にキック、インターフェアなどで自滅、攻めきれない。49分、右サークル内側から横田の状況判断の良いパスを高倉が決めて、3点目を取る。このQは、試合を決定づけるが、PCが1本と攻めあぐむ。

第4Q、開始から攻めあぐむが、2・3列目の攻撃参加から、左右への大きな展開ができるようになる。60分、PCを得る。川上のシュートから、横田がリバウンドシュート、続けて高倉がリバウンドシュート決め、4点目を上げる。

結果的に勝利を得たが、前半、ゲームの流れを日本に引き寄せるのに大変苦慮する状況が続いた。特に、相手の攻守陣形が中盤で大きく開いて、守備が厳しく固められている状況でどう攻め切るか、一考を要した。焦って打ち込んだり、ドリブルで自滅する点など反省点が多い前半だった。相手のペースに合わせてしまう、相手のペースにハマる点が出たゲームととらえたい。

○10月23日(水) 14時00分 < Bピッチ >
 < 第3試合 > (Asian Cup 第2戦) ・ (T/T 第5戦)

日 本	1	[0	—	0]	0	Malaysia
			0	—	0			
			0	—	0			
			1	—	0			

第1 Q、立ち上がり、マレーシアのパス回しで中盤を支配されるが、マレーシアのトップ3に対する打ち込みにマークを徹底する。同時に、マレーシアの打ち込みのパスを上手くクリヤーする。日本は、2分にP Cを得るが得点には至らないが、マレーシアの打ち込みパスも日本バックスの田島・水谷・石田の確実なマークにあい徐々に合わなくなる。マレーシアのトップ3と2・3列目が大きく空きだした10分ごろからは、日本は中盤のパスがつながりだし、右サイド攻撃からTポイントへの配球やサークル内の打ち込みが通るようになる。日本は、マレーシアにP Cを与えず上手く乗り切るが、多くのシュートチャンスを活かせず両チーム無得点で終える。

第2 Q、マレーシアはロングヒットのパスで攻撃の起点となるセンターフォワードに合わる攻撃を繰り返すが、マークする守備陣のインターセプトやクリヤーで確実に守る。マレーシアのロングパスが合わず、動きが鈍くなる。一方、日本は、2列目からフォワードへのパスが繋がるようになるが、サークルトップ辺りまで攻めてもリーチ差で奪われたり、パスの遅さなどのミスで一進一退のゲーム展開の流れとなる。このQは、P Cは取れないが、相手P Cを1本、無失点に抑える。

第3 Q、マレーシアは、ロングパスの攻撃から、左右サイドのボール回しの攻撃に変えてくる。日本は、この攻撃に押され守備位置を下げすぎ、サークル内の攻防を多くしてしまう。その一方で、自陣からのパスをサイドに送り、速攻の機会が増してくる。しかし、なかなかサークル内まで持ち込めず、P Cを取れない。43分、50分、52分にマレーシアにP Cを与える。が、守備陣の粘りで守り切る。

第4 Qは、開始からマークも確実に1対1の競り合いに負けない守備から、パスが両ウイングに回るようにする。その状況のなか、54分、右サイドライン中盤でパスを受けた鹿野が速攻で23mまで持ち込み、DFウラ側にクロスボールを打ち込むと、左ウイングから右ゴールポストまで走り込んだ横田がうまく体を回してタッチシュートを決める。見事な速攻プレーだった。その後、マレーシアの反撃も激しく、55分、60分（リプレー有）、65分、立て続けに四度のP Cの攻撃をうけるが、GK浜岡の再三のファインセーブと守備陣の体を呈してのクリヤーで守り切る。65分のP Cのシュートを足に受けた川上が負傷した後の最終ピンチも守り切った。最後の最後まで、集中力を持ってプレーし、粘り強く守ったDFの頑張りを称えたい。

○ ASIAN CUP (+ 6 5) < 最 終 成 績 >

優 勝	日 本	2 勝 0 敗
2 位	マレーシア	1 勝 1 敗
3 位	韓 国	0 勝 2 敗

☆ 最優秀選手賞 川上豊次 (日本)

○ TOURNAMENT TROPHY (+65)

優 勝	LX CLUB ENGLAND	5 勝 0 敗
2 位	SOUTHEN CROSS	4 勝 1 敗
3 位	JAPAN	3 勝 2 敗
4 位	MALAYSIA	2 勝 3 敗
5 位	KOREA	0 勝 4 敗 1 分 (特失点差)
6 位	ALLIANCE	0 勝 4 敗 1 分 (特失点差)